

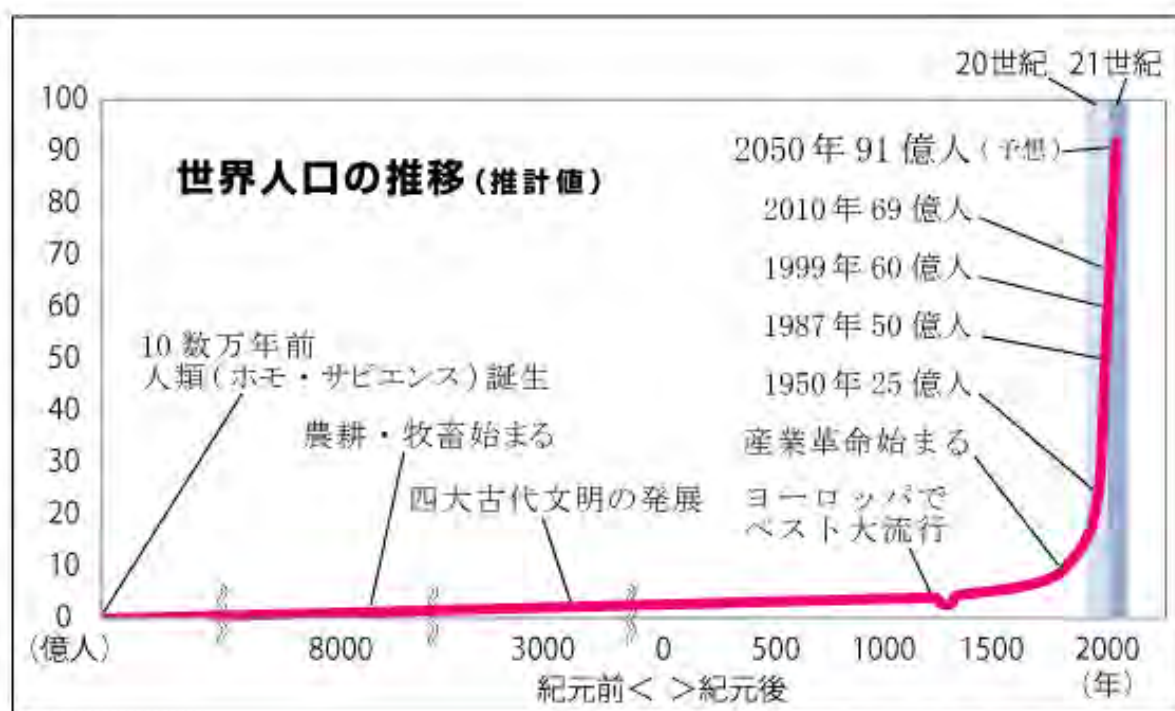
## 【連載】

# 5つの向かい風を超えて (その1)

間瀬俊明\* (昭42年卒 デジタルプロセス(株))

今から8年ほど前に、『お手本のない時代 日本の物作りはIT化、グローバル化時代に再生できるか』という小文を書いた事があります(注1)。当時の問題意識は今でもそのまま通用しそうというより、むしろ一層困難さを増しているように感じます。そこで難しさを承知でもう一度分析を試み、新しい処方箋を考えてみようと思いました。

少し長くなりそうなので3回に分け、1回目は日本の製造業にとっての5つの向かい風とは何か、2回目はそれぞれがなぜ向かい風なのか、そして3回目はそれらを超えどのように世界に貢献できるのか、について書いてみたいと思います。

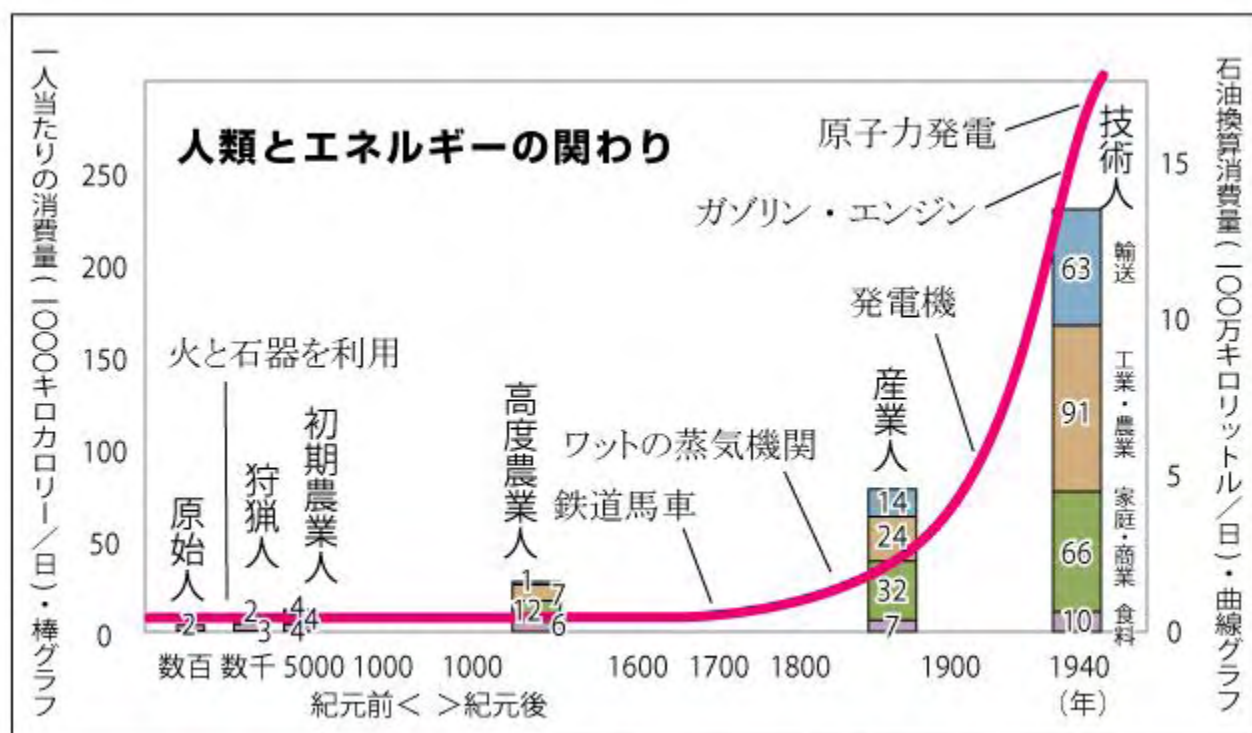


出典：国連人口基金東京事務所・改

図1 世界人口の推移

\* デジタルプロセス(株)で1997年から2009年まで12年間社長を務め、昨年(2009年)から相談役になりましたが、社長時代から折にふれ、私どものお客様向けの内輪の機関紙(DIPRO NEWS)にいろいろな小文を寄稿をしていました。その一部を紹介させて頂きたく思っていたのですが、同期の藤川さんがエネルギー問題について110号から長らく連載されたままの記事を改めて読んだところ2か所ほど類似していることが分かりました。言いたいことや趣旨は若干違うのですが、藤川さんのと似た部分があるのは問題だと思いました。以前読んだことが無意識のなかであって、感銘して、考え方に影響を受けていたのではないかと推察しています。掲載見合わせを世話人の久保さんに問い合わせたところ、そのことだけでほかの部分の掲載も止めるのはどうかと思うとの返事を戴きましたので、そのまま掲載をお願い致しました。

宇宙が生まれて137億年、地球の歴史46億年、人類の歴史10数万年、そして今、世界の人口69億人です。ここに世界人口の推移グラフがあります(図1)。10数万年前の人類誕生から産業革命までの間、人口の絶対数と増加率はこのグラフで見ればほんの僅かなものです。しかし産業革命以後のたった200年間は垂直に近い凄まじい勢いで増加しています。そして40年後の2050年には91億人に達するとの予測です。またエネルギーの一人当たり使用量の推移を見ると図2のようになっています。この図のように、指数関数的に増える一人当たりのエネルギー消費量と、それ以上に急増する世界人口を掛けることで得られるエネルギーの総消費量は、人口増加の更に指数倍ということになります。その結果、有限の地球が悲鳴を上げることになりました。それでも科学技術の進歩と自由主義経済の拡大はとどまることがありません。そんななか、日本は高度成長期以降、歴史上嘗てないといわれたほどの猛スピードで成長し、安全で豊かな国を作り上げることに成功しました。



出典：「エネルギーを考える」総合研究開発機構・改

図2 エネルギーの一人当たり使用量

※(注1)学際(構造計画研究所)2002年5月号掲載

しかし米国に次ぐ世界第二位の経済力を得た後、今度はお手本がなくなったためか急速に勢いを失くし、近年は停滞どころか衰退の懸念さえ持たれるようになりました。

失われた10年がなぜ20年になろうとしているのか、その真の原因を追究し日本再生に向けた新たなシナリオを作れないかと心から思います。とはいえそれが極

めて困難なことは過去の経緯が物語っています。夢や希望を持ちにくいといわれる昨今ですが、私たちにとって共通の目標として掲げられるのは、『破綻寸前の有限の地球を守り、持続可能な新たな地球システムの創造に向け、さまざまな分野で日本が自他ともに認めるリーダーとしての役割を果たす。そしてそこで得た総合的な課題解決の方策を率先して実践し、世界のお手本となる』といったことではないかと思えます。以下にこの目標をテーマにして考えてみたいと思えます。

この目標を実現するためには、日本の得意な自然科学や先端技術で直接的に牽引するのはもちろんですが、それ以上に社会科学や人文科学などのあらゆる知識や知恵を総動員し、再生のシナリオを創り出し実行しなければなりません。

省エネ技術もいくら世界一と言っても、それを自国の社会システムとして活用できなければ世界の信頼は得られません。せっかく効率化されてもその分を無駄に使っては有限性に応えたことになりません。日本というシステム全体が、持続可能な社会のお手本になれば、そしてそのシステムや技術を提供することで世界に貢献できれば、必ず豊かで（注：ここでは従来の単なる物質的な意味ではなく、全く新しい概念での豊かさを意味します）、そして尊敬される国になると思えます。それだけでなく新しい産業やビジネスが生まれる絶好のチャンスになると思えます。しかしそれには並大抵ではない努力やブレークスルーが必要です。従来のように、どこかにお手本はないかと探しに行く姿勢はもうやめにして、自らがお手本になることを目指すことが何よりも大切と思えます。その大切さを日本の若い人や次世代の人にしっかり伝えられれば、社会に希望と活力が生まれ、そして目標に向かってチャレンジする日本に生まれ変わると信じます。

少し前の新聞に、「日本の競争力、27位に急落、中韓台下回る、スイスの有力ビジネススクールIMD（経営開発国際研究所）のまとめ」とありました。「経済状況」、「政府の効率性」、「ビジネスの効率性」、「社会基盤」の4分野で58カ国を対象に、統計や独自調査の結果を分析し順位を決めているとのこと。1980年代、マレーシアはルックイースト政策で日本をお手本にしてきましたが、ここでは10位とはるか日本の上になっています。また毎年発表される日本の一人当たりGDPは統計機関により若干の違いはありますが、ここ数年、先進国中最下位に近い17位～20位を低迷しています。政治の混迷、少子高齢化に伴う労働力の減少、1000兆円といった膨大な国の借金や世界一高い法人税など、マイナス情報を挙げるに事欠かきません。

エズラ・ヴォーゲルという社会学者が1979年に著した本のタイトル「ジャパニアズNo.1」は、80年代、栄華を極めた日本経済を象徴する言葉としてしばしば用

いられてきました。しかし今では当時の見る影すらありません。たった20年間で先進國中トップクラスから最下位近くまで急落し、社会全体が活力をなくしてしまったのです。昨今の日本の在りように世界は幻滅しつつあり、このままでは世界から忘れられた存在になってしまうでしょう。

さて、ここでもう一度、1990年ごろを境に一体何が変わったのか、振り返って考えてみたいと思います。私たちを取り巻く最大の変化、それはやはり押しとどめられない"グローバル化"の流れであったと思います。そしてそれに並行して、あたかも通奏低音が奏でられるような"オープン化"の底流がありました。舞台あるいは「場」としての"グローバル化"と「思想」としての"オープン化"はセットとなって、"IT化"、"モジュール化"、"システム化"の三つの大きな流れを加速し、それらの価値を高める大変重要な役割を演じました。つまり1990年前後の大きな変化として、

- ①「グローバル化」
- ②「IT化」
- ③「モジュール化」
- ④「システム化」
- ⑤「オープン化」

の5つを挙げることができます。そしてその関係は(図3)のように表せます。

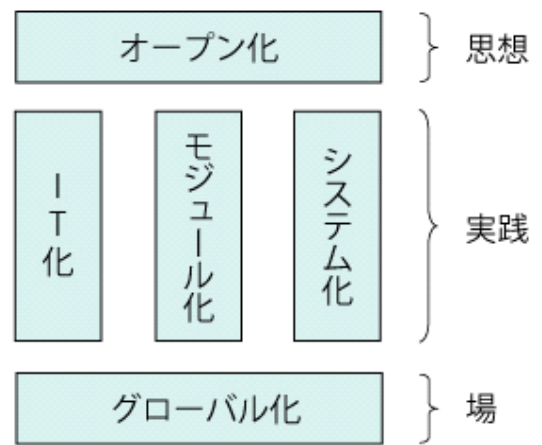


図3

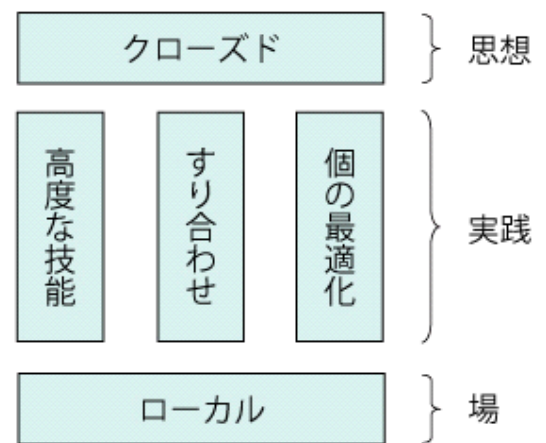


図4

この5つの変化は、それぞれ風の強さや役割に違いはあれ、結局は向かい風であったのです。なかでも最大の風であったグローバル化は、当時、貿易立国日本にとってむしろチャンスと位置付けた人も多かったのです。しかし今日あるのはグローバル化に取り残された日本の姿です。なぜこの5つが私たちにとって向かい風であったのかを分析し、それらを乗り越えるだけでなく、持続可能な地球システムの創造に向け、是非リーダーとしての役割を担いたいものです。

もし「5つの向かい風」の仮説が正しければ、それまでの日本の成長を支えてきた力は、それらの対立概念であったと見做せます。

- ・ グローバル ⇔ ローカル
- ・ IT ⇔ 高度な技能
- ・ モジュール ⇔ すり合わせ
- ・ システム ⇔ 個の最適化
- ・ オープン ⇔ クローズ

つまり1990年以前は、

- ① ローカルな場での戦いであった
- ② 高度な技能、即ち暗黙知を強みにできた
- ③ 全体をすり合わせることで高い競争力を持ちえた
- ④ システム志向が弱くても個々の、まねのできない最適解で優位を獲得できた
- ⑤ クローズドな思想はすり合わせにとって都合がよかった

ことが日本の成長の原動力であったと考えられます（図4）。

このように1990年ごろを境に、あるものは徐々にあるものは急速に追い風から向かい風になってしまいました。一方で日本にとっての逆風は、旧社会主義国や発展途上国に自由市場経済の拡大をもたらし、それらの国の成長を促す役割を果たしました。そして同時に地球の有限性（限界）を早める大きな要因にもなったのです。

次号では、5つの変化についてなぜ起こったのか、日本にとってなぜ向かい風であったのかについて少し詳しく考察してみたいと思います。

(つづく)

## —— 京機短信への寄稿、宜しくお願い申し上げます ——

### 【要領】

宛先は京機会の e-mail: [jimukyoku@keikikai.jp](mailto:jimukyoku@keikikai.jp) です。

原稿は、割付を考慮することなく、適当に書いてください。MSワードで書いて頂いても結構ですし、テキストファイルと図や写真を別のファイルとして送って頂いても結構です。割付等、掲載用の後処理は編集者が勝手に行います。宜しくお願い致します。



## シルクロードを旅して (その3)

1966年 機械科修士卒 平 忠明

### 「各処古城・仏教遺跡→大乘仏教と小乗仏教→敦煌遺跡」

トルファンからクチャ経由でアクスまでの天山南道に沿ったコースは遺跡の宝庫である。詳しい解説は観光ガイドブックに任せるとして、まづ、今回訪問した遺跡の名前だけを列挙すると交河故城、高昌故城、ベゼクリク千仏洞、クチャ寺院、スバシ仏寺である。これらの仏教遺跡は東晋時代の400年頃、60歳を超えてからインドへの修行に旅立ちスリランカまで到達した法顕、その直後、唐時代に国禁を犯してインド天竺まで行き、仏教の原典を持ち帰った玄奘三蔵（西遊記で有名）達がいわゆる小乗仏教（お釈迦様だけが唯一の仏）の普及に努めた足跡を辿れるところである。残念ながら、これらの遺跡はその後の戦乱、主としてイスラム教徒占領時に、かなり多くの仏像・壁画が破壊された。

残された数少ない仏像・壁画は、20世紀初頭以降に主として、ヨーロッパ諸国：ドイツ、英国、スエーデン、ロシア、スイス等に持ち帰られ、今だ返還に至っていない。（ヘディン、スタイン探検隊の影響が大）

#### ベゼクリク千仏洞

火焰山の谷間にあるベゼクリク千仏洞は5～6世紀の高昌国の時代に開かれイスラム教がトルファンに入る13世紀末まで700年あまり栄えた。石窟内には美しい仏教壁画があったが、イスラム教徒や西洋の探検隊に剥がし取られ、現在ではわずかしか残っていない。

### 吐峪溝(とよくこう)

高昌故城より車で20分ぐらい走ったところトルファンとピチャンとの中間ぐらいにあります。見どころは大峡谷、千仏洞、古民家、ホージャ墓からなります。古民家は300年以上の歴史を持つと言われ、実際にウイグル人が住んでいます。遺跡かと間違えてしまうほど崩れそうな住居ばかりです。ここに来て初めてウイグル人の真の生活・文化を見た感じがしました。



### クムトラ千仏洞:

ムザト川の下流にあり「下の千仏洞」とも呼ばれています。現在112の洞窟が存在し、大部分は唐代のものですが、南北朝時代まで遡る石窟もあります。クムトラ千仏洞の壁画は西方の文化や中原地方の文化の影響だけでなく、その地方独特の技術的特徴を帯びています。内壁や外壁には僧侶の名前や言葉が古代文字で大量に記されており、これらはクチャ(亀茲)の歴史文化を研究する上で貴重な資料となっています。

### 塩水溪谷:

クチャから北へ伸びる国道(217号線)チャールタグを通り抜け、天山山脈を突切り、天山北路側に通ずる国道がある。この国道を10キロほど北上すると、土地の人たちが「塩の水の川」と呼ぶ、塩水溪谷がある。この溪谷には殆ど水はなく、河底には結晶した塩が白く見え、両岸には風化で出来た独特地形が、この土地の厳しい環境を表している。



### クズルガハ烽火台(克孜爾乃小哈烽火台):

クズルガハ土塔はクチャの北15kmの旧領上にある烽火台の遺跡。クズルガハとはウイグル語で「赤い嘴のカラス」という意味。この烽火台は漢代の軍事建築物で15kmおきに造られ、非常時の際に都へ急を知らせるための施設でした。現存する塔の高さは約16mあります。塩水溪谷から程近い平たい台地に、悲劇の伝説が残る「クズルガハ烽火台」がある。その昔、亀茲国の王は年老いてから授かった、珠のように美しい王女をちょう愛し、ある日占い師に「この娘は100日以内に死ぬであろう」



と宣告された国王は、この地に土の塔を築いて王女を隠すことにし。しかし100日目に国王が贈ったリンゴを食べ、王女は死んでしまったと言われる、新疆地区最大の烽火台跡で、東西6m、南北4.5mの土台に、高さ約13mの土塔が残っている。烽火台の左側は切り立った断崖になっており、干し上がった雄大な大河の眺めは壮観で、入門ゲート等の建物は一切無いが、おじさんがしっかりと入門費を徴収している。

### クズルガハ千仏洞(克孜爾乃小哈千佛洞):

烽火台から、岩ばかりでゴツゴツした溪谷の道を10分ほども車で走ると広い谷間にでる。ここがクズルガハ千仏洞。塩水溪谷の岸壁にある石窟で、漢代から唐代にかけて合計46窟が造られた。しかし戦争などで破壊が進み不完全ながら壁画が残っているものは10窟程度しかないとの事窟の入り口には鍵がかかっているが扉の窓から中の壁画が見える。中が暗いので、懐中電灯を用意しておくといい。入り口には管理小屋が有り、管理人は常駐してないようである。後で聞いた話だ、石窟の中を見たい時は、キジル千仏洞で申し込んで、ガイドと一緒に来ることになるという事でした。

### スバシ故城(蘇巴什故城):

クチャから北へ23km。天山山脈のチョルターグ山の南麓に創建された仏教遺跡で、クチャ河を挟んで西寺区と東寺区に分かれている。(通常は西寺のみ見学可能です)。魏晋時期に創建され、唐代には玄奘の「大唐西域記」に登場する亀茲国最大の寺院「昭怙麗大寺(アーシュチャリア寺)」だと考えられている。東西寺区とも、東西150m南北600m程の広さで、その中に遺跡が点在しています。西寺区には高さ18mの仏塔があり、塔の上にも登る事が出来ます。塔の上からは対岸の東寺区も一望できます。その他に僧坊や殿堂等多くの遺跡が残っています。西寺区を河の方に歩いて行くと、クチャ河の向こうに東寺区の仏塔なども見えます。クチャ河と言っても、河は大部分が干上がっています。僅かに端の方だけ水が流れている程度です。仏塔跡や講堂跡などが現存していますが、木簡銀貨仏像などの出土品より亀茲国の繁栄振りが偲べれます。





キジル千仏洞（克孜爾千佛洞）：  
1973年に発見：中国四代石窟の  
一つで、クチャから北西へ70km  
のバイチョン（拜城）県にある。  
中国で最も早く開かれた敦煌・莫  
高窟に匹敵する石窟寺院。クチャ  
西北75kmの拜城県に位置し、ム  
ザト川沿いに3.2kmにわたって開  
削され、現在、236窟が確認され  
ています。3世紀頃から作られ始  
め、8世紀末ごろに放棄されたと  
言われています。そのうち172窟  
が仏殿で64窟が僧房窟。塑像は  
破棄されてしまい、ほとんど残っ  
ていませんが、現存する壁画の素



晴らしさは新疆一。壁画の題材は、釈迦の誕生から涅槃までの仏伝図、釈尊の生前の物語（本生物語）と古代西域の各民族の人々の風俗画など。そのなかでも38窟（音楽洞）で見られる西域の楽器郡は、日本の正倉院にも伝来したものであることが判ります。石窟はムザト河北岸の40mの断崖に東西2キロに渡って削られ、3～4世紀頃、クチャからバイチョンにかけての一带は、亀茲国と言う一大仏教王国が栄えており、その亀茲国を代表する仏教遺跡！ その為か？「色即是空」で知られる高僧クマラジーバ（鳩摩羅什）の像が正面広場に建てられている（ガイドの話ではキジル千仏洞とク直接は関係はないようでした）。マラジーバとは石窟の掘削は3世紀（後漢末期）に始まり、6～7世紀に最盛期を迎えました。発見されている石窟の数は236-7窟で、内70窟に壁画が残存しており、81号は開放、48号は飛天。問題なのは見学費用がとてつもなく高い！ 入場料として100元、管理事務所で見学を申し込み、通常の窟を（5窟程度）案内してもらうだけで、200元が必要です。更に特別窟を見たければ、窟によって200元～1000元が加算される。カメラや手荷物などは全て管理事務所に預けねばなりませんから、先に預けると、窟の内外を問わず全く写真撮影ができません。周辺の写真だけでも撮りたければ、窟の見学を申し込む前に済ませた方が良さそうです。

(つづく)

ホージャ墓は中国イスラム教の聖地だそうです。  
入っていこうとすると、断られました。



## 野次馬話 第12話 「読み方」

S43卒 遠藤照男

### 「統廃合する」

企業、組織や文書等を、統合(或いは合同)し、同時に不要と看做される部分を廃止(或いは廃却、廃棄)するときの表現として、いつの間にか定着してしまった。因みに、新明解国語辞典第二版(昭和49年)、比較的腰の軽い広辞苑(但し手許にあるのは第二版(昭和44年))に、統廃合の語の記述はない。しかし、そのうちに辞書が是認してしまうだろう。

本来統合と廃合は独立した言葉であり、それらの意味は、次の通りであるが、

統合 複数のものを一つのまとまりあるものにする。

廃合 廃止したり合併したりすること。

であり、統合／廃合 → 統／廃合 → 統廃合 と音感よく変わって来たのだろう。

### 「だいがえ案」

「代替案」をくだいがえあん>と読む人が着実に増加している。サラリーマン生活三十数年間、行く先々の部署で、上司に対し「だいたい案ですね」、部下に対して「だいたい案だぞ」と正して来たが、既に癌細胞は体の隅々に分散している。但し本体は殺さぬ程度に同居している。

統廃合の項では辞書に記載されていない言葉を引き合いに出したが、これは辞書が是認してしまっている「読み」で、新明解国語辞典は「口語的表現」、広辞苑には「重箱読み」と記され、存在を認めている。古い人間は去れと言われてしまった気もする。大日本国語辞典には、見方が悪いのか、他のものに置き換える意味の言葉を探し出せなかった。「代替」をようやく見つけたら、読みはくだいがはり>で、即ち戸主や経営者がかわる意味での用例だった。

話が逸れるが、この辞書は旧仮名遣いで記されているため、仮名遣いの臃気な記憶をもとに「替」の用例を調べようとしたのだが、お手上げだった。因みに「交替」の「交」の旧仮名遣い表示は<かふ>なので、かふ〇〇の言葉で、「交」に何らかの字を加えた成句を探したが載っていない。旧仮名遣い表示は難しい。講・香・行・幸は<かう>と記す。

1. 悪化が懸念される米中通商関係

2010年10月28日

～人民元、グリーン技術製品とレアアースを巡る摩擦～

Washington D. C. Political and Economic Report(2010 / No. 034)

三菱東京UFJ 銀行ワシントン駐在員事務所長 奥智之

<https://reports.us.bk.mufg.jp/portal/binary/>

com.epi centric.contentmanagement.servlet.ContentDeliveryServlet/Internet/Reports/RD/Public/Production/  
BTM-WDCINFO%202010-No.034.pdf

米通商代表部（USTR）は10月15日、中国の風力・太陽光発電などといった「グリーン技術」製品に対し、通商法301条（不公正貿易慣行国の特定・制裁に関わる条項）に基づいて、調査を開始することを発表した。蓄電池や次世代省エネ自動車なども調査対象に含まれる。米国産業はグリーンエネルギー分野で自国産業の競争力を上げようとする中で、常に中国を意識してきた。最近では中国通貨問題などを巡って議会で対中圧力が強まる中、中国によるグリーン技術産業支援やレアアース輸出制限でも貿易摩擦が表面化しつつあり、米中通商関係は一層雲行きが怪しくなりつつある。

2. 米中間選挙、直前情勢に思うこと

溜池通信 vol.455 Oct. 29, 2010

<http://www.sojitz-soken.com/jp/send/tameike/pdf/tame455.pdf>

とうとう来週火曜日（11/2）は米中間選挙の投票日となります。本誌9月3日号「2010年米中間選挙を読む」では、政権党である民主党にとって油断のならない結果が出そうだと報告しましたが、直前情勢はさらに深刻なものとなっています。さて、その裏側には何があるのか。ティーパーティー運動とはどんなものなのか。そして選挙後の米国政治はどう動くのか。そして来月は重要な日程が目白押し。11月2~3日にはFOMCが量的緩和を決定する見込み。そして11月中旬にはソウルのG20と横浜のAPECがあり、オバマ大統領は両方に出席予定。さあ、これからどうなるのか。直前情勢をまとめてみました。

3. 諸外国と中国 —政治、経済、社会・文化関係—

2010年9月

<http://www.ndl.go.jp/jp/data/publication/document/2010/201001a.pdf>

国立国会図書館 調査及び立法考査局

こうした大国としての責任が求められ期待される中で、中国はどう対応しようとしているのか。2010年3月14日、第11期全国人民代表大会第3回会議閉会日の記者会見で、ドイツ通信社の記者が温家宝首相に対し、国際社会から期待されている指導的役割について、中国にはその能力があるのか、またその役割を果たす用意があるのか、と質問した。これに対し同首相は、今や「中国傲慢論」、「中国強硬論」、「中国必勝論」が現れていると前置きした上で、①中国は地域格差などの国内

課題を抱えており、依然として社会主義の初級段階にある、②今後も平和的發展を追求し、覇権を唱えることはしない、③国家主権と領土保全については毅然と対処する、と述べた後、④国際的な経済及び政治的問題の解決のため、中国は国際的協力を積極的に主張し関わってゆく、また、發展途上国に対する支援においてはいかなる条件も課さないと答えている。

本資料は、このように政治的にも経済的にもその存在感を増している中国と諸外国との政治、経済、社会・文化分野における関係を、それぞれの国・地域の視点から整理したものである。国・地域ごとに事情の異なる点はあるが、可能な限り客観的なデータに基づくとともに、各分野について比較対照できるように心がけた。

政治分野については、主として中国の改革開放後における二国間関係の推移を、中国が推進するパートナーシップ外交にも留意しながら記述した。経済分野では、急速な経済發展による各国・地域に占める中国の存在の高まりを、主として貿易面から明らかにした。社会・文化分野では、留学生等増大する人的交流、世論調査に見る各国における中国イメージの変遷、文化交流等の現状を中心に述べた。

#### 4. 中国における経済發展の中での政治改革

国際金融トピックス No. 188 2010年10月22日

<http://www.iima.or.jp/topics/2010/data/188.pdf>

国際通貨研究所 経済調査部 植田賢司

10月15日～18日に中国共産党第17期中央委員会第5回全体会議（「五中全会」）が開催された。中央委員会全体会議は5年毎に開催される党大会（次回は2012年開催）の間に原則年一回開催され、党大会に次ぐ重要な位置づけにある会議である。五中全会閉幕後に、習近平国家副主席が党中央軍事委員会副主席に就任する人事が発表され、これにより習近平氏は2012年秋に開催される党大会で胡錦濤国家主席の後継者として総書記に選出され、次期政権のトップに就任することがほぼ固まったと考えられている。また、五中全会では来年から始まる第12次5ヵ年規画に関する草案を採択し、①経済發展パターンの転換の加速、②民生の保障と改善への注力、③各分野の改革の全面的推進、という大きく分けて3つの方向が定められた。

#### 5. 新たな發展段階を迎えた中国ビジネスと商社 日本貿易会月報 2010年10月号

<http://www.jftc.or.jp/>

[http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010\\_12.pdf](http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010_12.pdf)

何とかしたいわが国の就職事情

[http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010\\_4.pdf](http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010_4.pdf)

上海万博後の中国経済の行方と日中経済関係の深化（扉）

[http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010\\_11.pdf](http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010_11.pdf)

上海万博後の中国経済の行方と課題（寄稿）

[http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010\\_28.pdf](http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010_28.pdf)

鈴木 貴元 みずほ総合研究所 アジア調査部中国室  
中国の「新興市場圏」と日系企業のビジネスチャンス（寄稿）

[http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010\\_31.pdf](http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010_31.pdf)

大西 康雄 日本貿易振興機構 上海センター所長  
巨大消費市場中国と商社ビジネス（寄稿）

[http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010\\_34.pdf](http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010_34.pdf)

梶原 謙治 住友商事 専務執行役員 中国総代表  
兼松中国現地トップに聞く 支店で満足するな、現地法人を目指そう（インタビュー）

[http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010\\_37.pdf](http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010_37.pdf)

稲葉 啓一 兼松 執行役員 兼松（中国）有限公司 董事長兼総経理  
2011年に創業150周年、中国貿易50周年 歴史的な節目を迎える蝶理（インタビュー）

[http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010\\_40.pdf](http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010_40.pdf)

井上 邦久 蝶理 取締役 中国総代表  
上海国際博覧会と日本館の出展（インタビュー）

[http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010\\_43.pdf](http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010_43.pdf)

江原規由 中国2010年上海国際博覧会 日本館館長  
上海たより

[http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010\\_46.pdf](http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201010/201010_46.pdf)

蝶理 取締役 中国総代表 井上 邦久

## 6. あらためてチャイナ+1を考える－中国経済の先を読む・その4－

三菱総合研究所 2010年10月19日

[http://www.mri.co.jp/NEWS/report/review/\\_icsFiles/afielddfile/2010/10/19/er20101019.pdf](http://www.mri.co.jp/NEWS/report/review/_icsFiles/afielddfile/2010/10/19/er20101019.pdf)

訪日観光に関する中国人の意識－中国経済の先を読む・その3－

[http://www.mri.co.jp/NEWS/report/review/\\_icsFiles/afielddfile/2010/08/25/er20100826\\_01.pdf](http://www.mri.co.jp/NEWS/report/review/_icsFiles/afielddfile/2010/08/25/er20100826_01.pdf)

農産物価格高騰に見る中国社会－中国経済の先を読む・その2－

[http://www.mri.co.jp/NEWS/report/review/\\_icsFiles/afielddfile/2010/06/25/er20100628\\_01.pdf](http://www.mri.co.jp/NEWS/report/review/_icsFiles/afielddfile/2010/06/25/er20100628_01.pdf)

中国経済における発展方式の転換と今後の消費動向－中国経済の先を読む－

[http://www.mri.co.jp/NEWS/report/review/\\_icsFiles/afielddfile/2010/05/28/er20100528\\_02.pdf](http://www.mri.co.jp/NEWS/report/review/_icsFiles/afielddfile/2010/05/28/er20100528_02.pdf)

## 7. 経済の動き 住友信託銀行 調査月報 2010年11月号 No.715・・・

<http://www.sumitomotrust.co.jp/RES/research/PDF2/715.pdf>

包括的な金融緩和政策について

[http://www.sumitomotrust.co.jp/RES/research/PDF2/715\\_1.pdf](http://www.sumitomotrust.co.jp/RES/research/PDF2/715_1.pdf)

米国追加緩和の狙いと長期金利への影響

[http://www.sumitomotrust.co.jp/RES/research/PDF2/715\\_2.pdf](http://www.sumitomotrust.co.jp/RES/research/PDF2/715_2.pdf)

人民元相場弾力化と利上げの背景

[http://www.sumitomotrust.co.jp/RES/research/PDF2/715\\_3.pdf](http://www.sumitomotrust.co.jp/RES/research/PDF2/715_3.pdf)

## 8. 中国進出企業の動向調査 中小企業を中心に1万社が中国へ進出

～ 小売業では2004年以降の進出が急増 ～

2010年10月22日

帝国データバンク

<http://www.tdb.co.jp/report/watching/press/p101005.html>

国内市場の縮小や円高が後押しする形で、国内企業が中国など新興国進出を加速させている。製造業者の生産シフトの高まりや、中国マーケットを取り込もうと、最近では小売、飲食店といった業態で進出する企業も目に付くようになってきている。

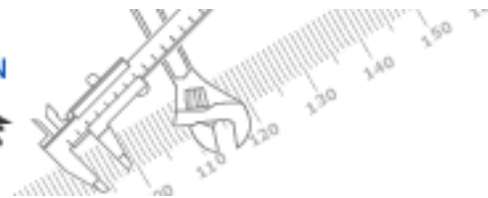
帝国データバンクは、自社データベース・信用調査報告書ファイル「CCR」(150万社収録)の中から、中国進出が判明している日本企業を抽出し、業種、企業規模、業績動向のほか、小売業をピックアップして、進出年、業績動向などについて分析した。

調査の結果、中国へ進出している企業は1万778社あることが判明した。業種別の内訳をみると、「製造業」が4546社で42.2%を占め最も多く、企業規模別では、従業員数「10人以上50人未満」が3547社と32.9%を占め最も多く、中小クラスの企業が多く進出していることが判明した。業績動向については、2006年度から2009年度までの売上比較が可能な7456社が調査対象。7456社の業績動向をみると、2007年度に増収が4514社と60.5%を占めていたが、2008年度は減収の数が増収を上回り、2009年度は増収が1520社、前期の2745社から44.6%減少した。

背景には、リーマン・ショックによる影響、また中小クラスの企業で、より業績への影響が顕著になって現れたものとみられる。中国はリーマン・ショック後の景気回復が早いとされたが、中国へ進出している企業でも減収傾向を余儀なくされている。

小売業(飲食店含む)では、進出年が判明している115社中、中国へ「小売業態」で進出した企業は60社で、60社中、この6年間で進出した企業が71.7%を占めた。また「小売業」で業績比較が可能な168社をみると、やはり年々増収企業の数が増えている。但し、2009年度の増収企業の割合は36.9%と、全業種の増収企業の割合(=20.4%)を上回っている。

詳細は <http://www.tdb.co.jp/report/watching/press/pdf/p101005.pdf>



## 報告

街中の木々が美しく色づく一方で、一段と肌寒さが厳しくなってきました今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか。KARTではスケジュールどおり11月1日より新車両の製作を開始致しました。自分達が設計してきたパーツが日に日に形になっていくことで、メンバーのモチベーションは更に高まっております。今回は車両製作の進捗状況を中心にお伝えしたいと思います。

### ○車両製作開始

当面の目標は年内に車両を着地<sup>※1</sup>させることですので、車両製作は先ず、車両の基礎となるフレームの製作から開始致しました。まだ数か所の溶接は残っておりますが、予定どおり11月中にフレームをほぼ完成させることができました。

フレームに完成の目処が付いてからは、次に優先度の高い足回り関連パーツの製作に取り組んでおります。



一方、エンジン周りのパーツは車両着地に必要ないため、エンジン班員もフレームや足回りの部品を優先して製作しております。とはいえ、今年度はシェイクダウン<sup>※2</sup>前からエンジンの開発を行っていく方針ですので、新しい吸気系など、エンジン開発のためのパーツの製作もフレーム製作の合間を縫ってこつこつと進めております。

今年度も昨年度同様、パーツ担当の垣根を取り払い、明確な優先順位のもと、必要な部品から順にチーム一丸となって製作していくというスタイルを取っております。こうすることで、ムダ・ムラの少ない車両製作を行っていくことが可能になると考えております。

一日も早く皆様に「車」としての形をお見せ出来るよう努力してまいりますので、引き続きご声援のほどよろしくお願い致します。

### ○京機会秋季大会&学生と先輩との交流会

11/13に行われました京機会秋季大会の一企画、オープン研究室に私達KARTも参加

させて頂きました。私達は昨年度車両YJ-R08の展示を行い、ご来場頂いた皆様に活動内容の紹介を致しました。引き続き開催された懇親会におきましては、KARTの活動を紹介するプレゼンテーションを行うとともに、ご歓談中のところにお邪魔して、ご支援のお願いをさせて頂きました。突然のお願いにも関わらず、多くの方々が耳を傾けて下さり、ご支援を賜りました。この場をお借りして御礼申し上げます。誠に有難うございました。



つづく11/27に開催されました、京機会学生会執行部様主催の学生と先輩との交流会及び懇親会にもお邪魔させて頂きました。私達KARTは京機会秋季大会同様に、懇親会の場で個人サポーター様のご支援をお願いさせて頂きました。ご支援を頂きました皆様に重ね重ね御礼申し上げます。

※1 車体が四輪で自立すること。

※2 新車両が完成してから行う初めてのテスト走行。